

短 報

## 統合保育園における 多動傾向をもつ精神遅滞幼児の行動分析

本保恭子<sup>1)</sup> 佐久川肇<sup>2)</sup>

ノートルダム清心女子大学 家政学部 児童学科<sup>1)</sup>

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科<sup>2)</sup>

(平成5年11月17日受理)

### The Behavior Analysis of a Developmentally Disabled Infant with Hyperactivity in Integrated Early Childhood Education

Kyoko MOTOYASU<sup>1)</sup> and Hajime SAKUGAWA<sup>2)</sup>

*Department of Child Welfare*

*Faculty of Home Economics*

*Notre Dame Seishin University<sup>1)</sup>*

*Okayama, 700, Japan*

*Department of Medical Social Work*

*Faculty of Medical Welfare*

*Kawasaki University of Medical Welfare<sup>2)</sup>*

*Kurashiki, 701-01, Japan*

*(Accepted Nov. 17, 1993)*

**Key words :** developmentally disabled infant, hyperactivity, behavior analysis,  
integrated early childhood education

#### 緒 言

一般の幼児には、多動行動が著明にみられる時期はあるが、これは通常思春期までには消失する。しかし、これとは異なり、微細脳損傷や精神遅滞の場合にも多動行動がみられることがある。このような場合、注意力や認知能力の発達障害のため自己中心的になりやすく、協調性や適応性を欠きやすい。したがって、多動行動を持つ子ども（以下多動児とする）においては、特に社会生活の基本を習得する幼児期の保育・教育の意義や必要性が大きくなることはいうま

でもない。

そこで、我々は多動傾向を持つ中度精神遅滞幼児1名の半年間の統合保育場面の観察により、多動児と健常児や保母との関係および多動行動の変化について検討を試みた。

#### 方 法

##### 1. 対 象

生活年齢4歳11か月（観察開始時）の中度発達遅滞男児を対象とした。多動傾向があり、落ち着きがない。一か所で一人でぐるぐる廻るという常同的な動きが頻繁にみられる。物をすぐ

表1 行動評価基準

動 作		発声・発話	
肯定的	否定的	肯定的	否定的
<ul style="list-style-type: none"> <li>・手で触る</li> <li>・抱きつく</li> <li>・自ら手をつなぐ</li> <li>・玩具を共有する</li> <li>・物を渡す</li> <li>・手伝う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・たたく</li> <li>・つねる</li> <li>・蹴る</li> <li>・物を奪い取る</li> <li>・相手が作った物を壊す</li> </ul>	右記以外の相手に向けられた発語・発話	(相手に向けられた)・奇声 <ul style="list-style-type: none"> <li>・泣き声</li> <li>・泣き叫び</li> <li>・拒否的发声</li> <li>・拒否的发話</li> <li>・攻撃的发声</li> <li>・攻撃的发話</li> </ul>

口にいれたりなめたりする。特に細長い物（マジックペンなど）を好み常に持を歩いている。新版K式発達検査の結果、DQ 50, DA 2.4歳、認知・適応領域 DQ 40, DA 2.0歳、言語・社会領域 DQ 25, DA 1.2歳で、言語・社会領域に顕著な遅滞がみられた。観察時、倉敷市の障害児保育指定園で2年目の保育期間中であった。

## 2. 手 続 き

一斉活動の最初の20分間の対象児の多動行動、対人関係の観察を行い、チェックリストに記入した。観察は、1992年4月から10月まで週1回、合計20回行われた。1回の観察記録時間は、朝の自由遊びの後、10時からの一斉活動の最初の20分間であった。

### 1) 多 動 行 動

園田・草野ら<sup>1)</sup>の「多動行動チェック表」を参考に、我々が独自に作成したチェックリストを用いた。このリストは、対象児にみられる多動性・動作の激しさ・情緒の不安定さについてチェックする10項目からなっている。

### 2) 対 人 関 係

園山ら<sup>2)</sup>の行動評価基準(表1)を用いて、対象児と保育士および健常児の関わり行動を肯定的行動と否定的行動に区分し、チェックした。

## 結 果

### 1. 多 動 行 動 (図1, 表2, 表3)

20回の観察期間中に対象児にみられた多動行動の変化を図1に示した。また、多動行動の10項目それぞれの出現頻度を表2に示した。1—3回(慣れの適応期間)を経過すると、出現頻

度は急激に減少したが、その後は観察の最後まで、多少の増減を繰り返しながら恒常的な状態が続いた。

さらに、表3には、20回の観察を慣れの期間、前期、中期、後期の4期に分け、多動行動の種類用平均出現頻度を示した。平均出現頻度については、その差を検定するため多動行動の種類別に1要因の分散分析(F検定)を実施したが、いずれかの項目においても各期間のあいだに有意差はみられなかった。このことより、半年間という期間に多動行動の変化を明らかにすることは、困難であった。

#### 1) 動作の多動性

動作の多動性については、第7回までは増減が激しかったが、その後減少傾向がみられ、後半7回にはまったく出現しなかった。

「1. 次々と辺りの物に触る」については、観察開始期の約2か月にかけて高い頻度でみられたが、これは常時ペンやマジックを口にいており、保育室の備品をいれている籠のそばで、入っている物を手にとったり、触ったりしていたためである。「2. 常同的な遊びをする」については、第1回にのりを立てたり倒したりする行動が1回みられたが、それ以降は記録時間中には1度もみられなかった。多動行動のうちもっとも多かった行動は「3. 常同的な動きをする」である。第3回は、31回記録され、第7回の観察時に6回、第13回に5回と突発的に現れていた。第3回は雨天であったため園庭に出られず、絶えず廊下を行ったり来たりしていた。第7回と第13回は、一人でぐるぐると廻っていた。

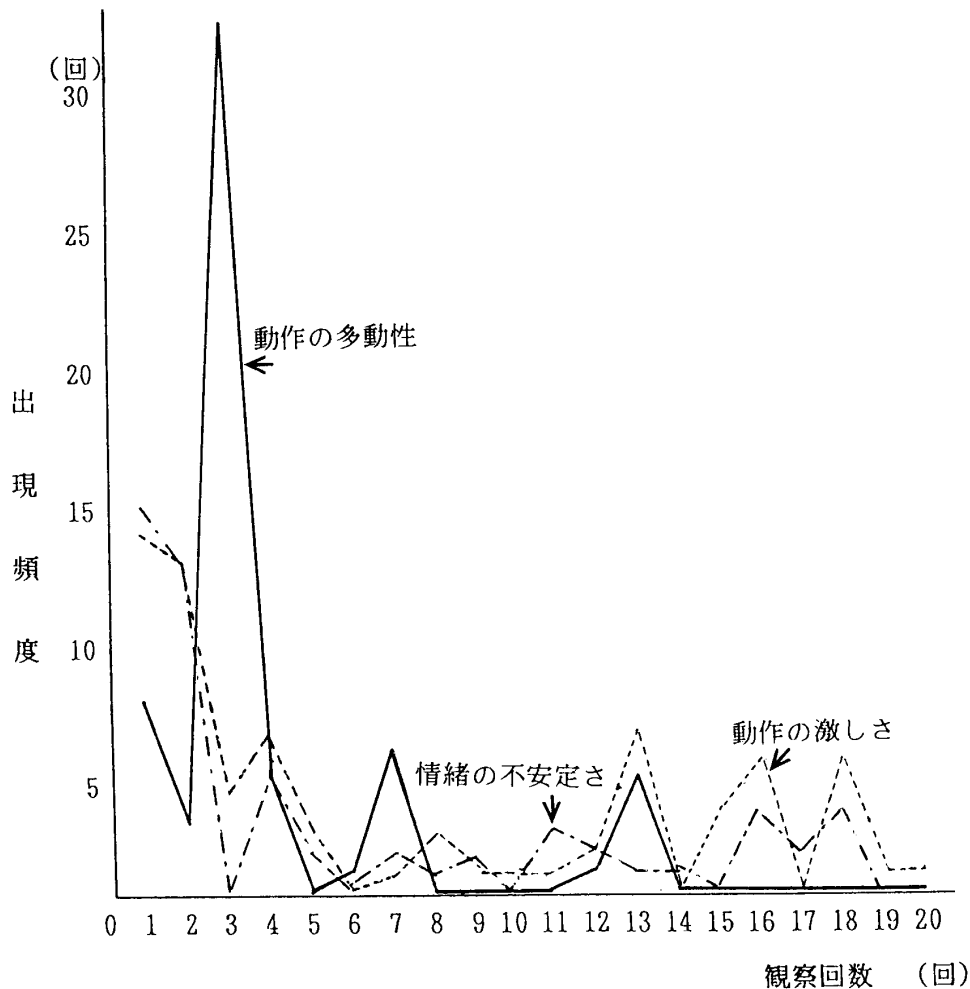


図1 多動行動の出現頻度

## 2) 動作の激しさ

動作の激しさについては、記録開始時にもっとも多く14回みられ、その後第11回までは変動はあるが減少傾向がみられた。第12回から18回にかけて激しく変動し、その後まったくみられなかった。前期、中期、後期それぞれの平均出現頻度と慣れの時期との差をT検定によりみると、すべて5%水準で有意差がみられ、慣れの期間とその後の差が大きいことがわかった。

多動行動のうちもっとも多かった「3. 常同的な動き」の次に多かった行動が「4. 突然走り出す」である。第1回、2回ともに6回の頻度を記録しているが、これは給食室や水道に向かって突然走り出すことが多く、水道の蛇口をひねり、水を出す動作がしばしばみられた。「5. 物を投げる」については、第1回にもっとも多く記録された。手に取ったペンやマジックペン

を投げることが多く、身近にあるものをただ投げるといふ動作がほとんどであった。「6. つまづく・転ぶ」については、20回のうち4回それぞれ1回ずつ記録されたにすぎず、第10回以降は1度もみられなかった。「7. 乱暴な行為をする」についても頻度は少なく、その内容はすべて健常児を押すという行為であった。

## 3) 情緒の不安定さ

情緒の不安定さについては、「動作の激しさ」と同様の傾向を示しており、有意差は認められなかった。第1回、2回に顕著に出現頻度が高く、15回にかけて多少の変動はあるが、減少傾向がみられた。しかし、第16回から再び増減が激しくなっていた。

情緒の不安定さを示す項目である「8. 泣く・かんしゃくをおこす」、「9. 奇声を発する」は「10. 欲求を我慢できない」場合、パニックを

表2 多動行動の出現頻度

観察回数		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
多動性	1 次々と辺りの物に触る	1	1	2	5		1						1								
	2 常同的な遊びをする	1																			
	3 常同的な動きをする	6	2	3	1			6						5							
動作の激しさ	4 突然走り出す	6	6	4	3	2		1	1		1	1	2	6		2			1	1	
	5 物を投げる	7	6		4				2							2	4		4		
	6 つまずく・転ぶ		1	1		1				1											
	7 乱暴な行為を行なう	1												1			2		2		
情緒の不安定さ	8 泣く・かんしゃく	4	3		1	1			1			1		1	1		3	1	1		
	9 奇声を発する	7	4		3	1		1					1								
	10 欲求を我満できない	4	3		1			1		2		2	1				1	1	3		

(空欄の出現頻度は 0)

表3 多動行動の観察時期別平均出現頻度

	観察期間	慣れの期間	前 期	中 期	後 期
	観察回数	1—3	4—9	10—14	15—20
多 動 性	平 均	14.67	2.00	1.20	0
	S D	13.12	2.52	1.94	
動作の激しさ	平 均	10.67	2.50	2.20	3.00
	S D	4.03	2.29	2.48	2.45
情緒の不安定さ	平 均	8.33	2.00	1.40	1.67
	S D	6.24	1.53	1.02	1.80

N. S.

起こし現れることが多かった。「9. 奇声を発する」は、徐々に減少し、第13回以降は一度もみられなかった。

## 2. 対人関係 (表4)

### 1) 対象児から他児への関わり行動

対象児から他児への関わり行動がみられたのは、20回中4回にすぎなかった。第7回にのみみられた肯定的関わり行動は、対象児が他児の肩を手で触る行為であった。否定的関わり行動は、対象児が他児の持っていたペンを取る、他児を押すという行為であった。

### 2) 他児から対象児への関わり行動

他児から対象児への関わり行動は、20回中10回記録され、すべて肯定的関わり行動であった。この肯定的関わり行動は、のべ15回であったが、

そのうち8回は健常児からの関わりであり、7回は他の障害児からの関わりであった。

### 3) 対象児から担当保母への関わり行動

対象児から担当保母への関わり行動については、かなりばらつきがみられた。第2回に肯定的関わり行動が9回と多くみられたが、これは、対象児が担当保母に両手足を持ってもらい、ブランコのように揺らしてもらい遊びを何度もせがんだためである。その他の肯定的関わり行動は、保母に抱きついたり、手をつないでもらったり、保母の手を引っ張って保母を別の場所に連れて行ったりする行為であった。否定的関わり行動については、第1回では、保母が持っている本や椅子などを奪い取る行動がもっとも多く、17回記録された。その他、対象児が保母の髪

表 4 対人関係別出現頻度

		(回)																				
		観察回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
対 象 児 → 他 児	肯 定 的								1													
	否 定 的										1							1		2		
他 児 → 対 象 児	肯 定 的		1	1					2	1		2		2	2	1	2		1			
	否 定 的																					
対 象 児 → 担当保母	肯 定 的		2	9		4				1		2	3		3	3	5					
	否 定 的		17			3												3				
他 児 → 担当保母	肯 定 的		1						1													
	否 定 的																					

(空欄の出現頻度は 0)

を引っ張ったり、叩いたりする行為もみられた。

#### 4) 他児から担当保母への関わり行動

他児から担当保母への関わり行動は、肯定的な関わりがのべ2回みられたにすぎず、否定的関わりはまったくみられなかった。

### 考 察

#### 1. 多動児への対応

本研究の対象児は、絶えずペンなどの長い物を持ち歩き、次々と辺りにある物に触るなどする多動性、その場でぐるぐると回り、時には数分間も回り続けるような常同行動、遠くを見ていたかと思うと突然走り出すなどの衝動性、自分のしたいことをさせてもらえなかったり、欲求が満たされないと著しく情緒が乱れ、泣き叫び手がつけられなくなる興奮性などの精神遅滞特有の問題行動がある。

これらの行動が現れるのは、おもに周りに人が多くいる時や、自分のしたいことをさせてもらえない時である。坂本ら<sup>3)</sup>は、多動児が診断場面や治療状況に臨むとより多動行動を示したり、攻撃的になったりすることから、多動行動というのは他人とある距離を保とうとしたり、対人関係に対する一種の防衛本能となっていることを指摘している。本研究の対象児の場合も同様な傾向がみられ、多動行動の生起に他人との距離が大きく関わっていることが確認された。

しかし、観察の継続にともない、対象児に他児と一緒になければ活動に参加しないという場面がみられるようになってきた。また、後半常動的な動きや遊びは顕著にみられなくなってきた。

た。これらの行動の変化から、本対象児の多動行動の改善と発達の可能性が示唆されると考えられた。

対象児が、したいことをさせてもらえない時に多動が顕著に現れる点については、対象児には言葉がないために、自分の要求を人に円滑に伝えられず、そのことが多動をより激しくしていた。また、対象児は欲求不満に対する耐性が低く、不満感、いらだちなどをコントロールできず、合理的解決をはかることなく、そうした感情を爆発的にあらわしていた。対象児の感情が著しく乱れ、パニック状態になった時の対応として、担当保母は対象児が好むブランコに連れて行ったり、無理に嫌がることをさせず、精神的に落ち着くよう抱いたり、背負ったりするよう配慮していた。観察終了時、対象児自身が自分の感情コントロールしようと自らブランコの所へ行く様子がみられるようにまでなったことから、担当保母の対応が対象児にとって適切であったことがうかがわれた。

#### 2. 多動児の対人関係

本研究の対象児は、簡単なオウム返しは可能であるが、コミュニケーション手段としての言葉はもっていない。そして、保母や母親のようなある特定の大人への働きかけはみられるが、それ以外の人に対する働きかけは乏しく、コミュニケーション能力の発達の遅れによる対人関係の乏しさがみられていた。また、対象児には周りに人が大勢いる場所での常同行動がみられたが、この常同行動がコミュニケーション能力の発達を阻害している<sup>4)</sup>と考えられた。

しかし、常同行動の回数も減少し、一斉活動で周りに健常児がいてもその場に一緒にいる場面も観察されるようになった。この頃から、他児を押す行動がみられ、他の健常児が遊んでいる方を眺めている様子がみられた。このことは、発語や社会相互作用の基礎となる「健常児からの刺激を受ける・健常児を模倣する」といった多くの研究者が報告している統合保育の効果<sup>5-7)</sup>への第一歩であると思われた。

### 3. 多動児における統合保育の有効性

対象児は、通常人が大勢いる場所を嫌悪し、人がいない場所へと移動していた。そのため、対象児の他児への関わり行動がみられたのは、20回中4回にすぎなかった。しかし、プールにおいては、クラス全員が活動している中へ自ら入って行き、他児への関わりはないが、身体全体を動かしてクラスに溶け込み楽しんでおり、外界への関心をうかがうことができた。

ここで、保母の役割の大きさについて改めて指摘しておきたい。対象児は、プール遊びを非常に好んでいたために、他のクラスの幼児がプールに入っている時もプールの方ばかり走っていった。このとき、保母は単にプールに入ること禁止するのではなく、他児よりも長い時間プール遊びをさせるなどして、精神的にも充足させてやり、保母と対象児の関係を深める機会

として柔軟な対応をしていた。このように、保母の障害児の気持ちを尊重した幼児に適した対応によって、水遊びを楽しむことができ、遊びの上での興味の持続性、保母との人間関係の確立、安定した気持ちで保育を受けることへとつながっていったのではないかと、また、そのような状況が対象児の多動行動の減少、外界への関心の芽生えを促す結果をもたらしたのではないかと考えられた。

## 結 語

多動行動をもつ子どもの多くは、乳幼児期から複数の問題行動を示す。その問題行動は、いったん生ずると容易には改善されず、改善に向かうまでに長びくか、あるいは生育過程で一段と悪化させ、深刻化させることも多い。

このような状況の中で、本研究の対象児であった多動傾向をもつ精神遅滞幼児においても、半年間の統合保育期間中には問題行動が軽減したことを明確に確認できなかった。しかし、保育に適應するまでの最初の約一か月間とそれ以後の多動行動の出現頻度には大きな差があった。このことから、統合保育は、個人の障害に即した意図的な長期的な教育的介入がなされるならば、多動児の集団生活への適應は可能であり、成果につながるであろうことが示唆された。

## 文 献

- 1) 園田律子, 草野勝彦 (1988) 多動傾向を示す児童の行動特徴の分析. 日本特殊教育学会第26回大会発表論文集, 124-125.
- 2) 園山繁樹, 秋元久美江, 板垣健太郎, 小林重雄 (1989) 幼稚園における自閉性障害児のメインストーリーミング——機会利用型指導の試み——. 特殊教育学研究, 26(4), 21-22.
- 3) 坂元龍生, 西岡充子 (1978) 児童の多動行動に関する研究. 大阪教育大学 障害児教育研究紀要, 創刊号, 33.
- 4) 北川貴嗣, 藤田継道 (1987) 常同行動等影響を及ぼす要因に関する調査. 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 548-549.
- 5) 園山繁樹, 秋元久美江, 伊藤ミサイ (1989) 幼稚園における自閉性障害児の発話の出現過程と社会的相互作用. 特殊教育学研究, 27(3), 107-115.
- 6) 巡 静一 (1975) 障害児と遊び, 初版, ミネルヴァ書房, 東京, pp 144.
- 7) 野村勝彦, 宮本文雄, 平田幸広, 武蔵博文, 大野由三 (1987) 精神遅滞児の早期教育に関する研究(その3)——保育園での指導に関して——. 日本特殊教育学会第25回大会発表論文集, 224-225.